

令和 2 年 2 月 25 日

教 育 長 様

代表者 校 園 名： 大阪市立阿倍野中学校
 校 園 長 名： 畠野耕二 校印
 電 話： 06-6628-0505 F A X： 06-6628-2496
 事務職員名： 町井緒利恵
 申請者 校 園 名： 大阪市立阿倍野中学校
 職 名 ・ 名 前： 校長 畠野耕二
 電 話： 06-6628-0505 F A X： 06-6628-2496

研究コース	
グループ研究B	
選定番号	243
校 園 コード (代表者校園の市費コード)	
712604	

平成31年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇平成31年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	グループ研究B	研究年数	継続研究 (3年目)
2	研究テーマ	「規範意識の醸成」と「確かな学力の定着」を目指す生徒指導の在り方について - 段階的指導の実践を通じて -			
3	研究目的	○本市児童生徒の「豊かな心の醸成」と「確かな学力の定着」のため。 ○文部科学省並びに法令等の趣旨等を受けて、「毅然とした生徒指導体制の構築」と「学校秩序の堅持」を、本市小中学校の教育現場に導入するための方策を研究実践するため。			
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。</p> <p>本研究会（「大阪実践生徒指導研究会」）は、創設以来13年間の研究活動を積み重ねてきている。14年目となる今年度の研究活動に関する報告は以下の通りである。なお、研究活動の詳細は、別途送付した令和元年度研究冊子をご参照いただきたい。</p> <p>(1) 月1回程度の研究定例会開催による、研究員所属小中学校の生徒指導実態の把握とその指導過程の考察及び生徒指導事例研修会の実施</p> <p>(2) 研究実践校（本年度より新たに大阪市立B小学校を追加）での『段階的指導』実践による指導効果の検証</p> <p>(3) 昨年度からの継続研究として発見した3つの知見【《児童集団の質》・《担任教員による見立て》・《小3ISSUE》】を立証するために実施した小学校教員意識調査（本研究会が作成したアンケート）の分析と考察</p> <p>(4) 学会・研究会等への参加及び研究発表の実施</p> <p>①6月 愛知県(6/29：名古屋情報メディア専門学校)で開催された令和元年度第1回愛知県実践教育研究会研究発表会への参加</p> <p>②8月 徳島県(8/8・8/9：鳴門教育大学)で開催された日本生徒指導学会への参加及び研究発表</p> <p>③9月 和歌山県(9/4：田辺市立田辺第一小学校)への生徒指導先進校の視察</p> <p>④11月 兵庫県(11/3：尼崎市中小企業センター)PEP TALK講演会の聴講</p> <p>⑤11月 岡山県(11/9：岡山学芸館高等学校)への生徒指導先進校の視察</p> <p>⑥11月 大阪府堺市(11/20：堺市立黒山小学校)への生徒指導先進校の視察</p> <p>⑦11月 和歌山県(11/22：田辺市立三栖小学校)への生徒指導先進校の視察</p> <p>⑧11月 愛知県(11/23：名古屋情報メディア専門学校)で開催された令和元年度第2回愛知県実践教育研究会への参加及び研究発表</p> <p>⑨2月 研究発表会(2/1：近畿医療専門学校)の開催</p>			

大阪府教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。

◆4-(1)に関して

各研究員所属校等での生徒指導実態の情報交換を行い、その指導過程について考察するとともに、生徒指導実践における勉強会を行った。

◆4-(2)に関して

本研究会は、平成22年度より研究実践校（本年度より新たに大阪市立B小学校を追加）における『段階的指導』実践を継続的に検証してきている。これまでの研究成果としては、①共通性…「教員の指導意識の向上」・「児童生徒の問題行動の減少と規範意識の向上」/ ②非共通性…「導入提案者」・「地域性」・「学力向上の度合い」/ ③【規範意識の醸成と学力の向上には直接的な相関性はない】という本研究会の結論/④ ③の検証に際し見出した新たな3つの知見《児童集団の質》・《担任教員の見立て》・《小3ISSUE》の立証の必要性がある。特に、3つの知見の立証に関する報告は、次の4-(3)・(4)に関する報告欄で行う。なお、大阪市立B小学校では、本年度4月より本研究会の『5段階による段階的指導』方法を基に本市「学校安心ルール」を実践したことで、重篤な問題行動発生数の減少（レベル3の発生件数が、昨年度6件⇒3件等）と落ち着いた学習環境の構築に成功しており、教員が真摯に授業力・学級経営力の改善・向上に向けた取り組み（例：夏季休業中の授業）に打ち込むことができるようになってきている。

◆4-(3)・(4)に関して（※なお、機縁法・インタビュー法による小学校教員意識調査は、男女比・教員キャリアに偏りなく実施できたものと認識している。そして、計202名から得た回答結果を検証・考察した。）

i) 《児童集団の質》《担任教員による見立て》…本研究員による経験的な実践知と先行論文からのエビデンスを基に、教員が児童集団を見立てる際に“集団の状態”を判断し得る項目を10項目設定し調査を行ったところ、表Ⅰのような結果を得た。上位6項目（太字）を基にレーダーチャートを作成し、担任教員に同調査を実施することで、担任教員がその児童集団の状態を項目別に如何に捉えているのかを可視化（レーダーの形状による）することに成功した。この調査を複数の小学校で実施し、同結果から学級・学年ごとの児童集団の持つ特徴を視覚的に把握することができるようになった。則ち、《児童集団の質》の存在を、帰納的に証明したものであると確信するに至った。

表Ⅰ 『児童集団の質』を診る『担任教員の見立て』の結果

1. 学習に積極的である (20.5%)
2. 男女の仲が良い (18.2%)
3. 学級に貢献できる (17.4%)
4. 係・当番活動ができる (15.9%)
5. 保護者が協力的である (12.7%)
6. 問題行動が少ない (7.4%)
7. 問題行動に寛容である (4.4%)
8. その他 (2.7%)
9. 学習成績が良い (0.7%)
10. 仲良しグループがある (0.1%)

ii) 《小3ISSUE》…A小学校「学力経年テスト」結果から、「全ての年度で3年生時に学力が低下する」ことを発見した。その要因を表Ⅱのように考え、同調査結果を基に以下のように検証・考察を行った。
①4～6年生で“しんどく”なると感じている/② ①の理由には「発達段階」・「学級経営」が上位2つ/③“学級崩壊”の潜在化は3・4年生の割合高/④“学級崩壊”の表面化は4・5年生の割合高+3・6年生の割合同じ/⑤3年生の学年配置順位低が明らかとなった。これらの回答結果には、男女差や教員キャリアによる差異も見られ、大変興味深い結果を得たが、紙幅に限りがあるため、解説の詳細は割愛する。故に、本研究会としては、《小3ISSUE》を発生させない予防策として、規範意識の醸成と授業規律の構築を図る反復練習を低学年時からルーティーンをして取り入れることが重要であると提唱した。

表Ⅱ 『小3ISSUE』の要因

1. 教科的なこと…習得数増加・内容の高度化の可能性
2. 教育制度的なこと…学級数減少の可能性
3. 校内人事的なこと…学年配置の可能性
4. 発達段階的なこと…ギャングエイジ

iii) 知見の活用と応用…i・iiの学校現場へのフィードバック方法としては、①各担任教員の〈レーダーチャートの波形〉の分析から、管理職による教員への指導助言・支援に役立てることが可能になった/②『小3ISSUE』への対応方法として、「低学年用 段階的指導表」の必要性とその作成・運用を提唱すること」等が挙げられる。

《まとめ》
1. 《児童集団の質》《担任教員の見立て》《小3ISSUE》の存在の立証
2. 《児童集団の質》《担任教員の見立て》の活用方法と《小3ISSUE》への対応策の提案
3. 小学校教員意識調査による担任教員の“しんどい感”“助かり感”の把握方法の発見

《課題》
1. 生徒指導体制の点検・整備・改善
2. 《小3ISSUE》の対応方法としての「低学年用 段階的指導基準表」の啓発と普及
3. 小学校担任教員への《児童集団の質》《担任教員の見立て》調査方法の深化・発展

研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。

日程	令和 2 年 2 月 1 日	参加者数	約 66 名
----	----------------	------	--------

場所	近畿医療専門学校
----	----------

備考	①研究発表会参加者へのアンケート結果 設問1「回答者の所属」 小学校(20.4%) 中学校(32.7%) 高等学校(26.5%) その他(20.4%)
	②同アンケート結果 設問2「今回の研究発表について」 “大変有意義であった(79.6%)” “有意義であった(20.4%)”

5 成果・課題

6

研究発表等の日程・場所・参加者数